

# 名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.161

2006年10月

平野総長が中国の東北大学を訪問し名誉教授の称号を受ける  
平野総長が吉林大学創立60周年記念式典に招待される



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

# 名大トピックス No.161

## 目次

### ●ニュース

平野総長が中国の東北大学を訪問し名誉教授の称号を受ける	3
平野総長が吉林大学創立60周年記念式典に招待される	
シンポジウム「キャリアパス—博士学位取得者のキャリアパスを考える—」を開催	4
馳文部科学副大臣が本学を視察	5
庶友会が名古屋大学基金へ寄附	5
平野総長が理学研究科附属臨海実験所を視察	6
平野総長が生命農学研究科附属山地畜産実験実習施設と附属演習林を視察	6
平成18年度「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」に採択される	7
平成18年度「派遣型高度人材育成協同プラン」に採択される	7
平成18年職員体育大会を実施	8

### ●知の未来へ—若手研究者の紹介

幾何学・解析学、そして数理解物理学の融合の場	9
楯 辰哉 (大学院多元数理科学研究科助教授)	

### ●知の先端

分子レベルのものづくりに求める「美」	10
山口 茂弘 (大学院理学研究科教授/高等研究院教員)	

### ●キャンパスクローズアップ

14. 医学部保健学科東館	12
---------------	----

### ●学生の元気

和式馬術部 流鏑馬デモンストレーション	14
小倉 脩平 (経済学部経済学科3年 和式馬術部主将)	

### ●部局ニュース

全学技術センター装置開発系に感謝状贈呈	15
国際フォーラム「酸化ストレスと老化」を開催	15
モンゴル国立大学で日本法教育研究センター開所式を挙行	16
21世紀 COE プログラム「計算科学フロンティア」が国際理論応用力学連合シンポジウムを開催	18
ICCAE 2006年第5回オープンセミナーを開催	18
第22回防災アカデミーを開催	19
第1回多文化間ディスカッショングループを開催	19
第9回博物館特別展関連イベントを開催	20
博物館が第3回地球教室「徳山ダムの岩石を調べよう!!」を開催	20

●名大を表敬訪問された方々 平成18年6月16日～9月15日	21
--------------------------------	----

●受賞者一覧 平成18年6月16日～9月15日	22
-------------------------	----

●新任部局長等の紹介	23
------------	----

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成18年8月16日～9月15日	24
---------------------------------	----

### ●INFORMATION

中国語広報誌「走近名大」を刊行	27
-----------------	----

●イベントカレンダー	27
------------	----

●ちょっと名大史	
----------	--

「名古屋医科大学」「名古屋帝国大学」等の学印	32
------------------------	----

## 平野総長が中国の東北大学を訪問し名誉教授の称号を受ける 平野総長が吉林大学創立60周年記念式典に招待される





- 1 吉林大学創立60周年記念式典で祝辞を述べる平野総長  
 2 吉林大学創立60周年記念式典に出席した平野総長(左)と杉山理事  
 3 赫東北大学長から名誉教授の称号を受ける平野総長  
 4 周吉林大学長と記念品の交換を行う平野総長

平野総長、杉山理事は、9月14日(木)から17日(日)にかけて、中国の東北大学(瀋陽)及び吉林大学(長春)を訪問しました。

まず、総長一行は、15日(金)に、本学と全学学術交流協定を締結している東北大学を訪問しました。同大学では、同大学史館をはじめ、多くの学内施設を見学し、盛大な歓迎を受けるとともに、本学で工学博士の学位を取得した赫同大学学長と、お互いの大学を取り巻く様々な情勢について意見交換を行い、今後とも、学術交流に関して一層の連携を深めていくことを確認しました。また、総長のこれまでの業績が評価され、赫学長より総長に対して名誉教授の称号が授与されました。

続いて、赫学長の案内により、中国のマイクロソフトとも言われているIT関連の新興企業であるNEUSOFTを視察しました。NEUSOFTでは、

事業の一つとして、同大学で開発した技術の製品化を行い、得られた利益の相応分を大学に還元しており、中国では、大学、企業の双方に大きなメリットとなる国内の産学連携制度が確立されていることなどについて説明を受けました。

その後、総長一行は、東北大学と同様に本学と全学学術交流協定を締結している吉林大学の創立60周年記念式典に出席するため、瀋陽から長春に移動し、夕刻に開催された吉林大学主催の来賓招待会に出席しました。

翌16日(土)、総長一行は、吉林大学創立60周年記念式典に出席し、招待された日本の大学の中で、ただ一人、平野総長が祝辞を述べました。祝辞の中では、まず、中国語でお祝いの言葉を述べ、続いて、本学では、中国をアジアにおける教育・研究の連携拠点として考え、数多くの国際学術交流を推進

していること、昨年11月に本学初の全学的海外拠点として上海事務所を開設したことなどに触れ、同大学と本学との国際交流が一層活発になることを祈念し、あいさつを締めくくりました。その後、総長は周同大学学長と記念品の交換を行うなど、本学と同大学との関係が一層深まることが期待されました。

同日夕刻、総長一行は、立食パーティに出席し、パーティ終了後に開催された「パフォーマンス」を見学しました。「パフォーマンス」では、大学構内の競技場を屋外コンサート会場のように設営し、中国の有名歌手による歌をはじめ、様々な踊りなどが披露され、数多くの花火が打ち上げられました。会場には数万人規模の学生らが集まっており、大変な盛り上がりを見せていました。

# シンポジウム「キャリアパス—博士学位取得者のキャリアパスを考える—」を開催

8月27日(日)、シンポジオンホールにおいて、シンポジウム「キャリアパス—博士学位取得者のキャリアパスを考える—」が開催されました。同シンポジウムは、平成18年度の文部科学省科学技術関係人材のキャリアパス多様化促進事業に採択された「博士学位取得者に対するノン・リサーチ キャリアパス支援事業」のキックオフシンポジウムとして催されました。

この事業は、ポストドクター及び博士の学生を対象に、就職のためのキャリアパス支援を行うもので、特にノン・リサーチ分野である (1)調査・評価 (2)起業・技術移転 (3)知的財産管理 (4)国際協力の各分野について、専門職となるためのガイダンス、個別コンサルティング、基礎研修、インターンシップ等の支援を行っていくことを目的としています。日曜日にもかかわらず、北は北海道、南は香川、山口と全国から約160名の参加があり、大変な賑わいをみせました。

シンポジウムでは、まず、平野総長から「名古屋大学からは、文部科学省が募集した科学技術振興調整費の『若手研究人材の育成』と、キャリアパス多様化促進事業の2つの事業が採択され、ポストドク及び博士学位取得者の就職について、一貫して支援することになりました。」とのあいさつがあり、続いて、北尾善信文部科学省科学技術・学術政策局基盤政策課企画官から「人材育成の国の取り組みについて」、有信陸弘株式会社東芝 執行役常務・経営監査部部长から「企業からみた博士学位取得者への期待などにつ



会場の様子

いて」と題した基調講演がありました。その後、武田産学官連携推進本部長から事業概要の紹介や、ノン・リサーチ4分野（調査・評価、起業・技術移転、知的財産管理、国際協力）で活躍している専門家から、取り巻く状況や、実際の仕事内容などについての話がありました。

各分野に対する講演がわかりやすく興味深かったこともあり、参加者からは「今後の進路に大いに役立った。」「博士課程修了後は研究職しかないと考えていたが、いろいろあることが確認できた。」などの意見が出され、シンポジウムが意義あるものであったという好評の声が多く聞かれました。

シンポジウム参加者のうち、46名がこの事業に登録したいという要望を寄せており、シンポジウムだけでなく、事業そのものに対する期待も今後大きく膨らんでいくものと思われま



あいさつする平野総長



講演する高橋東北大学産学官連携推進本部副本部長



## 平野総長が理学研究科附属臨海実験所を視察

8月24日(木)、平野総長が、大峯理事、杉浦理事、杉山理事、山本理事、木村監事、近藤理学研究科長、山口施設管理部長とともに、大学院理学研究科附属臨海実験所を視察しました。

同実験所は、昭和14年に、名古屋帝国大学医学部附属臨海実験所として創設され、昭和17年4月の理学部創設と共に理学部の附属臨海実験所となり、現在に至っています。三重県鳥羽市菅島の南西に位置する同実験所は、敷地面積33,057m<sup>2</sup>、建物延面積1,181m<sup>2</sup>で、実験棟、宿泊棟、実験・宿泊棟、職員宿舎等で構成され、船舶を3隻所有しています。



実験棟で自由実験を行う生命理学専攻の大学院生



視察団一行と大学院生

同実験所での主な研究は、原索動物のホヤを用いた受精と初期発生機構や、受精における自己非自己の認識機構についてです。

平野総長一行は、鳥羽市中之郷棧橋に出迎えていた澤田所長をはじめとする同実験所の職員とともに、海洋調査船アスターに乗船し、菅島の臨海実験所に向かいました。当日は、同研究科生命理学専攻の臨海実習が行われていたことから、臨海実験所の棧橋には、実習に参加していた大学院生の出迎えがありました。

同実験所では、澤田所長により施設案内が行われ、実験棟、宿泊棟、実験・宿泊棟の研究室、実験室、RI実験室、宿泊施設を、屋外では流水水槽内で飼育されている実験用ホヤ、ウニを丹念に見て回りました。実験棟を視察した際には、生化学研究室で自由実験を行っていた大学院生に向けて、平野総長から激励の言葉がありました。

## 平野総長が生命農学研究科附属山地畜産実験実習施設と附属演習林を視察

8月29日(火)、平野総長が、杉浦理事、山口施設管理部長、福田附属山地畜産実験実習施設長、柴田附属演習林長、松田研究科長らとともに、大学院生命農学研究科附属山地畜産実験実習施設及び附属演習林を視察しました。

両施設は、東山キャンパスから車で2時間程度のところにあり、前者は動物遺伝資源にとって、後者は森を科学する同研究科の教育研究にとって欠くことの出来ない施設です。

初めに視察した同実験実習施設では、福田施設長から概要の説明があった後、<sup>くちのしょうじ</sup>口之島牛や山羊などの在来家畜や実



口之島牛の前で説明を受ける平野総長一行



演習林地内で説明を受ける平野総長一行

験動物を飼育している実験動物棟や牧草地前で動物を前にして、織田銚一同研究科教授から具体的な説明がありました。

続いて視察した同演習林では、肘井直樹同研究科助教授から施設の概要説明があり、6年前の東海豪雨のツメ跡が一部残る庁舎内を視察しました。その後、実験実習が行われている標高1000mほどにある演習林地まで行き、整然と立ち並ぶカラマツ、スギ、ヒノキ等の育成状況を視察しました。

両施設を視察した後、総長一行と施設の維持管理上の問題点や将来計画について活発な意見交換が持たれました。

## 平成18年度「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」に採択される

文部科学省「平成18年度世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」が選定され、本学から1件が採択されました。

本事業は、東南アジア及び中東において、今後日本が人的交流や国際貢献を進めるために必要な、政策的・社会的ニーズに基づくプロジェクト研究を実施し、日本とこれらの地域との「協働」、「相互理解」、「共生」に資することを目的とするものです。

今年度は、全国77機関から99課題の申請があり、書類審査とヒアリング審査の後、最終的に6件が採択されました。

### ○研究領域1

**日本と諸地域との関係性の解明－協働に向けて－**  
地域：

東南アジア

研究課題名：

東南アジア諸国－ベトナム、カンボジア、インドネシア等－に対する法整備支援戦略研究

研究代表者名・職名：

鮎京 正訓 法政国際教育協力研究センター長  
(法学研究科教授)

所属機関名：

名古屋大学 (法政国際教育協力研究センター)  
(大学院法学研究科)

## 平成18年度「派遣型高度人材育成協同プラン」に採択される

文部科学省大学院生長期型インターンシップ事業「派遣型高度人材育成協同プラン」が選定され、本学から1件が採択されました。

本プランは、自らの専門分野の位置づけを社会的活動全体の中で理解し、現実的課題の中から主体的に問題設定を行い、それに取り組む能力のある「高度専門人材」の育成が急務であるため、これまでの主として就業体験や職業意識の形成を目的としたインターンシップとは峻別し、産学が人材の育成・活用に関して建設的に協力しあう体制を構築することにより、社会の抱える諸問題や産業界の取り組みを理解し、知識基盤社会を多様に支える高度で知的な素養のある人材を育成するものです。

今年度は、30大学から30件の応募があり、審査の結果、10件が採択されました。

### 取組名称：

研究開発リーダーを育てる派遣型実践教育

### 取組担当者名：

澤木 宣彦 工学研究科長

### 取組の概要：

企業の中で実践的研究開発課題に挑む長期型「研究インターンシップ」、大学において学生が自ら研究課題を見直す「研究課題発展セミナー」、及び「知的財産教育」を基本とするプログラムにより、社会的価値の創造という視点から研究・開発を展望、遂行できる能力を有するリーダーの育成を目指す。研究インターンシップの恒常的な実施体制の構築により、産業界のニーズと大学院教育の目標とが整合する産学協同高等教育の実現を図る。

## 平成18年度職員体育大会を開催

8月24日(木)17時30分から、平成18年度職員体育大会が開催されました。

このイベントは、職員の健全な体育活動を通じて元気を回復し、職員相互の緊密度を高めることにより、勤務能率の発揮及び増進に資することを目的として、毎年開催されているものです。



大会の様子

今年度は、ピンポン大会が実施され、8チームが参加しました。各チームは、優勝を目指し、白熱した好ゲームを繰り広げました。

### 【大会の成績結果】

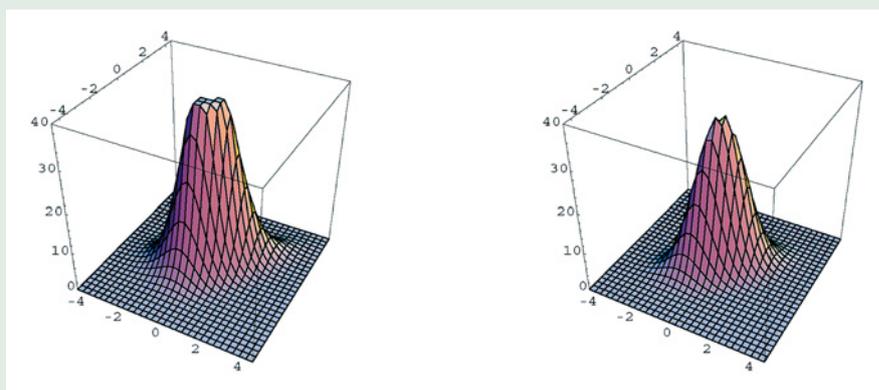
種 目	順 位	チ ーム 名
ピンポン	優 勝	有言実行
	準 優 勝	山の上卓球倶楽部

# 幾何学・解析学、そして数理物理学の融合の場

楯 辰哉 大学院多元数理科学研究科助教授

私の研究分野は、大域解析学、特に幾何学的漸近解析 (geometric asymptotics) と呼ばれる分野です。幾何学的漸近解析とは、幾何学と解析学の間位置する分野で、数理物理学で自然に現れる関数や量を幾何学的な設定で定式化し、その漸近挙動を調べる学問です。例えば“負に曲がった”閉じた空間での慣性運動などの複雑な挙動を見せる系の、固有関数の漸近挙動に関する、量

子エルゴード性 (quantum ergodicity、あるいは quantum chaos) と呼ばれる事象の解析もこの分野に属します。これに関連して、私が数年前、アメリカの研究者 シフマン、ゼルディッチと共にを行った研究では、無秩序系 (quantum disordered system) における固有関数の値の分布に関する Mirlin ら物理学者の予想が、ある理想的な可積分系においても現れることを示しました。



理想的可積分系の固有関数 (左) とスケール変換後の極限関数 (右)

可積分系という無秩序系とはある意味で対極にある系に対して、無秩序系における物理的な予想が現れるのは不思議な現象です。この仕事の後、私は幾何学的に定式化される多粒子系の量子統計

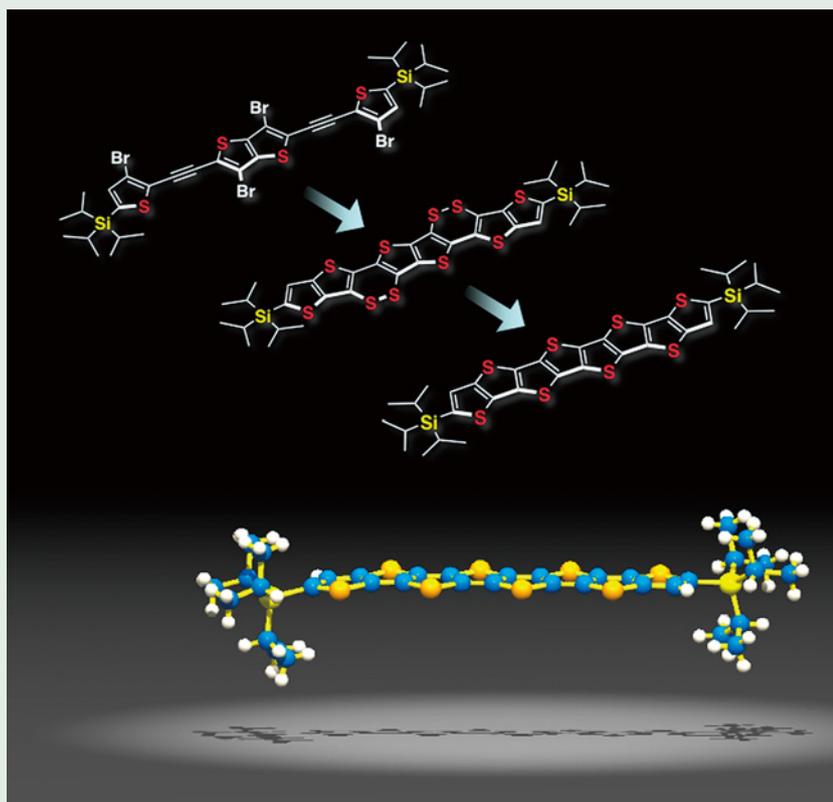
的問題に興味を持って研究をしています。幾何学、解析学を始め様々な数学の分野を融合させ、数理物理学的な一つの事象を解析すること、それを指針に今後も研究を続けて行くつもりです。

# 分子レベルのものづくりに求める「美」

山口 茂弘 大学院理学研究科教授／高等研究院教員

計測機器の進歩に伴い、現代の科学は著しく進歩しています。十年前までは観られなかったもの、測れなかったものが現在ではルーチンワークとして行えたりします。そのなかにあつて、物質を分子レベルで創り出す有機化学、有機合成という分野は極めて特異な存在といえます。フラスコを使って分子を合成するというスタイルは基本的に何十年も前から変わっていないのです。しかし、その精密さかというと、確実に、そして、格段に

進歩しています。右手と左手の関係にある分子のつくり分け、分子量数千にもものぼる天然物の全合成、分子の長さが揃った高分子の合成など、いろいろな局面で高精度の合成が次々と実現されています。では、これからの有機合成には何が求められるのでしょうか。もちろん個々の研究者によって意見は違うでしょうが、その根本は、「どれだけ意味のある化合物」を「いかに効率的に」創るかではないでしょうか。



新たな環化反応をもとにした縮環オリゴチオフェンの合成と X 線結晶構造解析により決定した分子構造

今、有機エレクトロニクス、プラスチックエレクトロニクスという分野が注目を集めています。有機EL（エレクトロルミネッセンス）ディスプレイ、有機薄膜トランジスタ、有機太陽電池などがその代表例としてあげられます。従来、無機材料で実現されてきたデバイスを有機物に置き換えることより、単に、軽い、折り曲げられるなどの有機物の利点を超えて、社会の生活形態を一変させる様々な応用展開が期待できます。例えば、ポスター状のどこにでも貼れる大画面テレビがお茶の間に登場するだけでリビングの様子がどれほど変わるか想像に難くないと思います。ここで大切なのは、この分野は化学のみならず、応用物理、電子工学までの幅広い領域の融合により成り立つわけですが、その中でも土台となるのはやはり材料であり、分子であるということです。これまで、C、N、Oなどの元素を中心とした化学により多様な材料開発がなされてきました。しかし、デバイスの絶対的性能、安定性、寿命など、根本的な課題が依然残っているのが現状です。真に優れた分子をいかに創り出すかがこの分野の共通した課題であるといえます。

これに対しわれわれは、これまであまり使われてこなかった13-16族典型元素に着目し、それら個々の元素の特性を巧く活かした分子設計を基軸としたアプローチにより物質創製を進めています。これまで、B、Si、P、S、Seといった元素を組み込んだ新材料の開発を行ってきました。この研究のモチベーションは、この分野の基盤材料となりうる分子の基本骨格を創りあげたいという考えです。そのためには分子はシンプルであればシンプルであるほどよく、かつ、究極でなければなりません。例えば、その一つの候補としてごく最

近合成に成功した“縮環オリゴチオフエン”を左図に示します。これは、硫黄を含む5員環であるチオフエン環のみがつながったシンプルで“美しい”構造をもつ分子ですが、これまで多くの関心を集めながらもその合成は困難でありました。我々は、アセチレン化合物を原料に用いた新しい環化反応を開発することにより一連の縮環オリゴチオフエンの効率的合成法を確立することができました。図に示す分子は2ナノメートルにわたる強固で完全に平面の分子構造をもち、また、分子間の特殊な硫黄-硫黄相互作用により特徴的な固体構造をとります。この構造に由来し、高い熱的安定性と高い電荷移動能を合わせもっており、従来の材料を凌ぐ高性能トランジスタ材料として十分に期待できます。この分子が多くの研究者の関心を引き、研究対象・題材として一人歩きするようになってくれば、本当に意味のある物質創製といえるのではないかと思います。

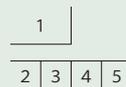
一つの分子の登場が、あるサイエンスの発展のブレークスルーに繋がることがあります。そのきっかけとなる分子というのは、ある観点、ある価値観において何某かの「美しさ」をもっているものです。そして何よりも、美しいと信じて自ら分子を設計し、合成し、実際に手にした時の感動が、われわれの研究の醍醐味であります。分子の「美」、分子がもつ物性の「美」を追い求めた物質創製により、意味のある分子を一つでも創ればと思っています。

1993年京都大学大学院工学研究科合成化学専攻修士課程修了、同年11月より京都大学化学研究所助手、2003年1月名古屋大学大学院理学研究科助教授、2005年3月より現職。その間、2000~2001年マサチューセッツ工科大学客員研究員、2001~2004年科学技術振興事業団さきがけ研究21（合成と制御）(<http://www.gousei.jst.go.jp/>) 研究員、2004年12月より科学技術振興機構 SORST 研究員専門分野：有機元素化学  
趣味：バスケットボール？

やまぐち しげひろ



## 14. 医学部保健学科東館



- 1 北側外観
- 2 X線撮影実習室
- 3 大講義室
- 4 南側外観
- 5 フロア構成

医学部保健学科は、医療技術の理論と実践を科学的に追及する医療技術科学を学問領域として確立させ、その科学、技術学及び実践技術を研究・教授し、幅広い基礎と高度な専門知識及び問題解決能力、感性ある人間性豊かな資質を備えた医療技術者・教育者及び研究者を育成することを目的として平成9年10月に設置されました。

平成10年4月より学生を受け入れ、平成14年度には大学院修士課程（入学定員48名）を、平成16年度には大学院博士課程（入学定員17名）を設置しました。

保健学科は、本学大幸キャンパスにあります。大幸キャンパスは地下鉄名城線のナゴヤドーム前矢田駅と砂田橋駅の間にあり、東山キャンパスと鶴舞キャンパスとはそれぞれ約4km離れています。

現在の保健学科校舎は昭和13年に三菱重工業社屋（事務所）として建てられた保健学科本館、昭和54年に医学部附属病院分院として建てられた本館、昭和60年に医療技術短期大学部校舎として建てられた保健学科別館の3つの建物がありますが保健学科別館以外の建物は、学校として建てられていないため、校舎としての使い勝手が悪く、なかでも保健学科本館は名古屋大学の建物の中では最も古く、戦災及び築後68年経過による機能劣化も著しく、実験機器等の更新にも支障を来していました。



そこでこの度、施設の狭隘・特殊施設の改善も含め保健学科本館の建替え計画が立案され、そのI期目として平成18年3月に保健学科東館が完成しました。

本建物は既存施設の改修では対応が困難な、放射線使用の実験・実習施設、感染性病原体・発ガン性物質・毒物劇物を扱う特殊検体取扱部門、「セルフ・ラーニング・スキルラボ」関連諸室、及び保健学科全体が一堂に会することができる規模の大講義室を優先して計画しています。

建物の配置は、II期計画建物との距離及び、既存保健学科別館との距離に配慮しながら（将来対応として屋外アメニティ広場用地を確保）将来計画建物と本校舎を渡り廊下で接続できる計画としました。

各階の諸室配置は、II期計画建物の各階構成を想定し、機能上の動線を考慮した構成としています。

1階は法令上の管理区域の規制があるRI実験室、X線実験・実習室等、放射線技術科学専攻関連諸室を配置し、放射線や機器の荷重等の下階への影響及び関係者以外の動線へ配慮した配置としました。

2、3階は検査技術学専攻の血液細胞・遺伝子研究室、病原微生物・ウイルス・免疫研究室、生理検査実習室、動物室、P2・P3実験室等の特殊な実験室を配置し、ガイダンスや専攻合同授業で使用する250人収容の大講義室は、建物の構造上上階の影響を受けず大空間を確保しやすい最上階（4階）に配置しました。

この建物は、建築物としての長寿命化を実現するため、さまざまな工夫をしています。

外壁以外はコンクリート製の間仕切りを極力減らし軽量鉄骨とボード張りにすることで、将来模様替えの際の間仕切り変更の自由度を高めました。（コンクリート壁を壊す際には、構造計算の見直しや、壊す際に大きな音・埃や振動が発生します。）

コンクリートのひび割れを抑制しコンクリートの劣化を遅くする目的で打設するコンクリート中の単位水量を厳しく管理しました。

また、建物外周の各階に設備用バルコニーを設置し、ドラフトチャンバー用排気ダクトや空調機の屋外機、パイプ類をここに設置することで、将来改修の際にも上下階の部屋を改修することなく更新・改修をできるようにしました。

環境負荷低減にも配慮し、地球環境保護への取り組みも行っています。熱負荷軽減を図るため1階屋上には屋上緑化を行い、また外周に設備用バルコニーを設置することで夏の日射しを遮るとともに、エキスバンドメタルの設置により、通風を確保しながら設備機器等の目隠しの役割を持たせました。春秋の中間期には熱エネルギーを使わず積極的に外気導入ができるよう窓には網戸を設置しています。

鶴舞、東山とのキャンパス連携を強化することを目的とし、4階の大講義室には最新の映像配信システムを設備し、学内LANを利用して同じ講義を3キャンパス同時に受けられるようになっています。また同じ階にある大学院講義室にも受信できる設備を整えており、授業にとどまらず多くの機会に活用されることを期待しています。

（施設管理部）

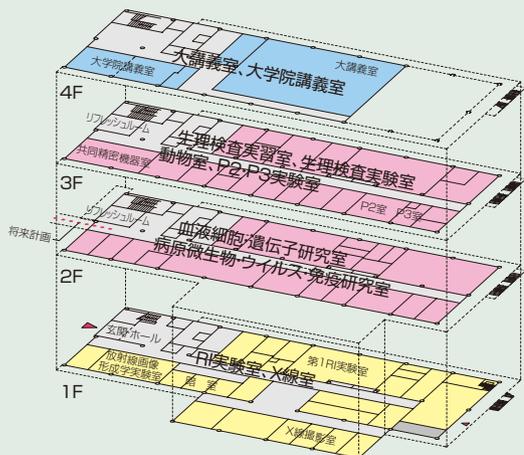
#### 建物概要

構造 鉄筋コンクリート造

階数 地上4階建て

建築面積 1,020㎡

延べ面積 3,280㎡



## 和式馬術部 流鏑馬デモンストレーション



平成18年6月10日(土)、名古屋大学和式馬術部が流鏑馬デモンストレーションを行いました。開催場所は名古屋大学教育学部附属中・高等学校(以下：附属高校)のグラウンドです。

今回の流鏑馬披露は、開催場所を提供していただいた附属高校では特別授業となりました。午前中には、『木曾馬の保存と利用』と題して講演が行われ、午後からは和式馬術部による流鏑馬を披露しました。この特別授業の一貫しての特徴は、外来種のサラブレッドではなく、日本の在来馬(昔から日本にいる馬)である木曾馬を扱っていることです。目的は日本の馬を、ルーツ・歴史・用途から今後の保存、活用にあたるまで、トータルに学んでいただくことです。流鏑馬披露は、流鏑馬だけではなく、馬に荷物をつける荷駄付けの実演、馬上で華麗に舞う馬上舞、馬上から60m離れた扇を射するという平家物語の那須与一の体験演習が行われました。(附属高校弓道部員により見事1名的中しました) また、最後には来場者の方に体験乗馬、曳き馬での体験流鏑馬が好評をいただきました。

和式馬術部は、平成17年9月7日に体育会に準加盟したばかりの日本唯一の新しい部活動です。一般の馬術部がサラブレッドに乗り、ブリティッシュといわれる西洋の馬術を取り扱っているのに対し、和式馬術部の特徴は、日本の在来馬に乗り、

日本伝統の古典馬術を対象としています。

名古屋大学と木曾馬は密接な関係があります。木曾馬は戦後、その種の危機に陥りました。まさに純血種は最後の1頭にまでなります。その後木曾馬は数を増やし、現在日本に100頭ほどいるといわれています。その100頭の祖ともいえる木曾馬、第3春山号の骨格標本が名古屋大学博物館に展示されているのです。しかしながら、日本の在来馬は未だ危機的状況にあり、生きる道を失っているのが実状です。

問題は、日本人は馬をどう捉えるのかということです。馬に対する捉え方、思想を反映したものが『日本の馬』になります。そのことを多くの人は見落としているように思います。西洋人は馬を何百年とかけて目的・用途に合わせて種を作りました。馬は、その民族の馬に対する捉え方を表した、そのものといえ、だからこそ民族は馬に誇りをもっています。そこには、馬に対する考え方を脈々と続けてきたルーツの重みがあるからです。サラブレッドを目の前にして、日本の馬の文化を語るには、あまりにルーツが軽すぎはしませんか。日本の馬はまだそこにあり、私たちが振り向くのを待っています。和式馬術部は牧場や練習場所をこれから手配整備し、日本の馬を対象として、それが日本の馬たる所以とそのルーツを探り、受け継いでいきます。

## 全学技術センター装置開発系に感謝状贈呈

全学技術センター教育・研究技術支援室装置開発技術系は、独立行政法人宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部(JAXA/ISAS)から、感謝状と記念品を贈呈されました。これは、赤外線観測衛星「あかり」に搭載した機器の開発に協力した同センター装置開発技術系の持つ高い技術力



M-V8号機打ち上げの様子



感謝状

と、赤外線天文学の推進に果たした大きな貢献に対して贈られたものです。

大学院理学研究科宇宙物理学研究室は、JAXA/ISAS、東京大学理学部、情報通信研究機構、国立天文台と共に赤外線検出器をはじめ、遠赤外線分光装置や信号処理回路などの観測機器開発を進めてきました。搭載電子回路の開発や分光装置の開発などは、全学技術センター教育・研究技術支援室装置開発技術系の技術職員をはじめ、研究者、メーカーの協力により行われました。

平成18年2月22日に、M-V8号機でJAXA/ISASが打ち上げたASTRO-F衛星は「あかり」と命名され、本学で開発された遠赤外線観測装置は順調に稼動し、貴重なデータが次々と送られて来ています。

## 国際フォーラム「酸化ストレスと老化」を開催

●エコトピア科学研究所

エコトピア科学研究所は、9月11日(月)、12日(火)の2日間、環境総合館において、先端技術共同研究センター、大学院医学系研究科との共催で、Oxidative stress and aging (酸化ストレスと老化) についての国際フォーラムを開催しました。これは、日本から約30名、海外から20名の合計50名が参加した比較的小規模な国際研究会で、参加



国際フォーラムの様子

国はイタリア、ポーランド、オーストリア、ドイツ、米国を含む6カ国でした。

本学とグダニスク医科大学、カメリーノ大学とグダニスク医科大学がそれぞれ協定を結んでいることから、毎年開催されている同フォーラムは、今回で3回目になり、1回目はポーランドのグダニスク医科大学において、2回目はイタリアのカメリーノ大学において開催されました。

今回は、分子生物学的観点から、活性酸素と加齢の関係をとり上げ、「ミトコンドリアは、エネルギー産生の場として、一般に知られているが、活性酸素も生み出され、いろいろな病気と関係している。とりわけ、生活習慣病と関係があるとともに、ミトコンドリアの遺伝子型が長寿とも関係しているらしい。」等の発表があり、活発な討論が行われました。

# モンゴル国立大学で日本法教育研究センター開所式を挙

●大学院法学研究科



文部科学省及び本学代表团一行

大学院法学研究科は、9月7日(木)、モンゴル国立大学において、名古屋大学日本法教育研究センター開所式を挙

行しました。同研究科が、文部科学省の特別教育研究経費の支援を受け、日本法教育研究センターを開設するのは、2005年のウズベキスタン共和国タシケント国立法科大学に続き、モンゴル国立大学が2番目となります。

同センターは、本学法学研究科特任講師、モンゴル国立大学講師(本学国際開発研究科2004年修了生)が常駐して日本語教育とセンターの運営に当たり、日本語による日本法の教育、卒業生へのフォローアップ、日本法図書館、科研費等による共同研究の拠点としての機能を果たす一方、全学間の交流の拠点、そして日本におけるモンゴル研究の現地拠点としての機能を担っています。

今回、同センターの開設により、本学とモンゴル国立大学との学术交流がますます発展し、日本のアジア地域における友好関係を安定、発展させ、相互理解を深めることが

できると期待されています。

当日、文部科学省及び本学の代表团は、モンゴル教育文化科学省、法務内務省及び日本大使館を表敬訪問しました。

開所式には、文部科学省から近藤文部科学審議官、大山国際課国際協力政策室長、野沢総務課課長補佐、本学から平野総長、佐分理事、豊田事務局長、松浦法学研究科長、鮎京法政国際教育協力研究センター長ら、また、市橋在モンゴル大使、守屋国際協力機構モンゴル事務所長、モンゴル国から、トゥムルオチル教育文化科学副大臣、スフバートル法務内務副大臣、ガンツォグモンゴル国立大学長、ナランゲレルモンゴル国立大学法学部長ら総勢100名を超える関係者が出席し、センターの開設を盛大に祝いました。

式典では、平野総長によるあいさつの後、来賓挨拶として近藤審議官による小坂文部科学大臣祝辞の代読があり、「同センターが、モンゴル国と日本の法政分野での架け橋となり、同じアジアの国として、両国の絆がますます深ま



あいさつする平野総長



あいさつする近藤文部科学審議官



あいさつする市橋モンゴル大使



モンゴル国立大学の歓迎（左から、平野総長、大山室長、豊田事務局長、近藤文部科学審議官、通訳）

ることを切望する」旨の期待が寄せられました。

引き続き、トゥムルオチル副大臣、市橋大使らのあいさつと、松浦法学研究科長によるセンター開設に至る経過の説明が行われました。

式典終了後には、視聴覚機材が設置されたセンター教室で、平野総長、ガンツォグ学長らにより看板除幕式、また、同教室と法政国際教育協力研究センター及びタシケント国立法科大学の日本法教育研究センターを衛星回線で繋ぐことで、テレビ会議による中継を行い、ITを駆使したセンター設備の一端を披露しました。

引き続き、本学主催のレセプションを開催し、来賓挨拶として、近藤審議官、オドバヤル法務内務大臣、トゥムルオチル副大臣ら、多数の方から祝辞が述べられました。モンゴル民族楽器の演奏・歌の披露される中、終始和やかな雰囲気に参加者全員がセンターの開設を祝いました。



名古屋大学主催レセプション会場にて（左から、平野総長、トゥムルオチル教育文化科学副大臣、近藤文部科学審議官、オドバヤル法務内務大臣）

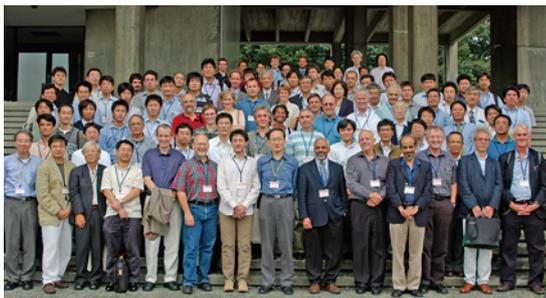
## 21世紀 COE プログラム「計算科学フロンティア」が国際理論 応用力学連合シンポジウムを開催

9月11日(月)から14日(木)までの4日間、野依記念学術交流館において、国際理論応用力学連合 (International Union of Theoretical and Applied Mechanics : IUTAM) シンポジウム「乱流の計算物理と新展望」が開催されました。本シンポジウムは、2004年8月、ワルシャワで開かれた IUTAM 総会で開催が認められたことにより、金田行雄工学研究科教授を中心とした21世紀 COE プログラム「計算科学フロンティア」(FCS) などの支援のもとに行われたものです。

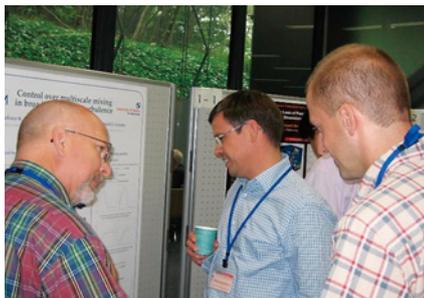
シンポジウムの目的は、乱流の計算科学の研究者だけで

なく、理論、実験の第一線にいる研究者が一同に会し、乱流研究における新しい知見、展望について議論を深めることにあり、特に乱流の基礎的側面及び背後にある物理の解明に焦点が当てられました。参加にあたり、原則として特定分野の第一線で活躍する研究者のみに、声を掛けたにも関わらず、12ヶ国、100名を超す参加がありました。

シンポジウムは、平野総長、IUTAM 代表の R. Narasimha 教授、組織委員長の金田工学研究科教授のあいさつに始まり、38件の講演及び34件のポスター発表が行われました。最終日午後、本シンポジウムの成果を受けて行われた、乱流研究における今後の展望についてのパネルセッションに至るまで、連日、密度の濃い活発な議論がされました。



記念撮影



ポスター発表会場で議論をしている参加者

## ICCAE 2006年度第5回オープンセミナーを開催

● 農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター (ICCAE) は、7月18日(火)、生命農学研究科A棟326室において、2006年度第5回オープンセミナーを開催しました。

同センター客員研究員であるケニア国立農業研究所キボス試験場社会経済部長のニュートン・オケチ氏から、JICA 支援による2年間の現地試験で選んだ陸稲ネリカ米

が、今後農家へ普及するにあたり必要な条件について説明があり、品種への関心、低生産コスト、栽培経験、年齢、教育などの条件が重要であることが分かりました。さらに、農民参加型による普及を図ることが重要として、そのための人材育成、生産資材の供給、手押し播種機、もみすり機などの整備や、価格保障などの行政機関による強力な支援が必要であることが強調されました。

当日は、大学院生命農学研究科の教員や大学院生、留学生、一般参加者など、約15名の参加があり、展示圃の有効性や農民参加による教育の重要性などについて熱心に討議しました。



講演をするニュートン・オケチ客員研究員

## 第22回防災アカデミーを開催

●災害対策室

第22回防災アカデミーが、9月19日(火)、環境総合館レクチャーホールにおいて、開催されました。

今回は、小山真人静岡大学教育学部教授による「火山と共生する社会—富士山を例として—」と題する講演が行われました。小山教授は、火山地質学の立場から富士山の研究を進めるばかりでなく、日本地震学会・日本火山学会に



第22回防災アカデミーの様子

よって毎年行われる「地震火山こどもサマースクール」に中心メンバーの一人として取り組むなど、科学知識の社会還元や教育普及といった面でも活躍しています。

講演では、最初に、正確な火山ハザードマップ作成に必要な噴火口の想定範囲、溶岩流や火砕流の影響範囲の見積り方などについて、丁寧な解説がありました。続いて、その結果に基づく被害想定を、いかにして地域住民や観光客にわかりやすく伝えるか、といった工夫の一端が紹介されました。また、富士山のハザードマップを、市民に公表する上で欠かせなかった、行政や観光業との調整についても興味深い話がありました。最後に、危機感をあおるだけの防災では長続きが見込めないこと、火山の恵みも理解した上で、身近な火山を意識して暮らし、必要な知識と知恵を身につけていくことが、防災を持続させる上で最良であることが結論として述べられました。

防災アカデミーは、今後も様々な自然災害を多様な視点からとらえる講演会を毎月開催予定です。

詳しくは、災害対策室ホームページ (<http://anshin.seis.nagoya-u.ac.jp/taisaku/>) をご覧ください。

## 第1回多文化間ディスカッショングループを開催 —世界的な友情を育む—

●留学生相談室

留学生相談室は、2005年度後期より、留学生の異文化適応、精神面の安定、留学生と日本人学生の相互理解を促進することを目的とし、グループ・アプローチを活用した教育プログラム「多文化間ディスカッショングループ」を始めました。

第1回は、2005年12月から2006年9月にかけて、留学生と日本人学生が定期的に同じメンバー(11名)で集まり、文化に関することや異文化体験、大学生活を送る中で感じていることなどをテーマに計16回のセッションを行いました。最初は、参加者の間に緊張やぎこちなさが見られましたが、話し合いを重ねるうちに、信頼関係が生まれ、日頃

感じている悩みなども、分かち合えるようになりました。

これまで扱ったテーマは、「身近な文化の違い」、「恋愛」、「夢・生き方」、「国際問題と自分の感情」、「家族」、「友人関係」、「進路」、「リーダーシップと役割」などで、自主的に企画した食事会やキャンプを通じて、メンバーは相互理解を深めながら友人関係を築いていきました。参加者からは、「異文化に対して寛容な心を持つことが大切であるということ」を教えてくださいました。(中国・学部生)、「ディスカッショングループは私にとって、自然体でいられる場所でした。(日本・大学院生)」などの感想が聞かれました。

2006年度前期からは、英語によるディスカッショングループも始まり、多文化間ディスカッショングループは留学生と日本人学生の大学生活を支える重要な役割を果たしつつあります。今後は、全学同窓会大学支援事業の助成を受け、学生のファシリテーターと共にグループ活動を行っていく予定です。

詳しくは、留学生相談室ホームページ (<http://www.isa.provost.nagoya-u.ac.jp>) をご覧ください。



グループの参加メンバー



最後のグループワークに取り組む参加者

## 第9回博物館特別展関連イベントを開催

博物館は、総合保健体育科学センター及び体育会と連携し、第9回特別展「スポーツと名古屋大学 する・みる・つくる」の中で、本学のスポーツ活動を紹介する一環として、同センターの教員を講師とした、全12回の「スポーツ科学連続講座」を開催しました。

9月13日(水)には、高橋義雄同センター講師により、第11回目として、「スポーツとファッション」と題した講座が行われました。ファッションとスポーツの関係を、社会

学的見地から捉える手法に、参加者全員が新鮮な驚きを感じたようです。同時に期間限定で、アテネ五輪競泳男子100メートル平泳ぎ金メダリストの北島康介選手のサイン入り水着と、競泳女子平泳ぎ入賞の田中雅美選手のサイン入り水着が特別展示されました。最終回は、ホームカミングデーに合わせ、9月30日(土)、島岡同センター長による、「健康運動の科学～中年からの健康づくり～」と題した講座を行い、盛況のうちに終了しました。



講演する高橋講師



北島選手及び田中選手のアテネ五輪サイン入り水着

## 博物館が第3回地球教室「徳山ダムの岩石を調べよう!!」を開催

博物館は、8月19日(土)、20日(日)の2日間、名古屋市科学館 発明発見創造クラブとの共催で、親子対象フィールドセミナー「第3回地球教室 徳山ダムの岩石を調べよう!!」を開催しました。地球教室は、科学技術振興機構 研究者情報発信活動推進モデル事業「モデル開発」の一環として行われており、今回は、読売新聞社と日本ウォーキン

グ協会主催の「みずウォーク」というイベントの協力を得て行われました。

今回のテーマは、「秋に湛水試験が開始される徳山ダムの工事現場で、川やダムと地質について考える」で、博物館と名古屋市科学館の職員及びアルバイトの計7名で指導を行い、一般から募集した25名(13家族)が参加しました。

初日は、名古屋市科学館において、プレートテクトニクスと付加体についての講義と断層形成実験を行いました。実験では、ココアパウダーと小麦粉を、交互に透明なプラスチック容器に落として地層を作り、横から押すことによって綺麗な逆断層を作ることができました。

二日目は、岐阜県揖斐川町にある徳山ダムの工事現場に行き、水没予定地に露出している美濃帯(ジュラ紀付加体)の砂岩・緑色岩や断層を観察しました。徳山ダムは、岩石を積み上げて作られたロックフィルダムのため、ダムサイトで、ダム建設に使われている岩石を観察し、自分でペイントやサインをした岩石を残してきました。

参加者には、普段何気なく見ている岩石にもいろいろな特徴があることを実感してもらう良い機会になりました。



徳山ダムのダムサイトで記念撮影

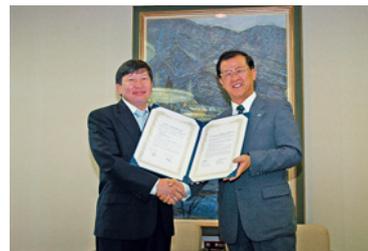
## 6.29 国立台湾大学「法人化の現状等調査」調査団

包国立台湾大学副校長、黄同大学政治学系教授、蔡（茂）、蔡（宗）の各法律学系教授、張法律学系助理教授が訪問され、本学における法人化の現状等について、調査及び意見交換が行われました。



## 7.20 モンゴル国立大学学長等

Ts. ガンツォグ モンゴル国立大学学長及び S. Narangerel 同大学法学部長が、本学と学術交流協定を締結するため訪問され、今後の学術交流について懇談が行われました。



## 7.25 韓国・木浦大学校夏季日本語研修団

平成18年度木浦大学校夏季日本語研修に参加のため、来学中の朴贊基木浦大学校日語日文学科助教授及び日本語講座受講学生代表3名が訪問され、研修の実施、生活状況等について懇談が行われました。



## 8. 7 清華大学教授

江億清華大学教授が8月7日に本学で開催された「地域冷暖房に関する日中シンポジウム」において講演し、パネルディスカッションに参加するのを機会に訪問され、両大学の研究交流等について懇談が行われました。



## 8.16 タシケント国立法科大学副学長等

ウズベキスタンにある日本法教育研究センター主催の夏季セミナーに参加のため、来学中のシャリーボフ・ルスタム タシケント国立法科大学副学長等及びセミナー受講学生が訪問され、セミナーの実施、生活状況等について懇談が行われました。



## 受賞者一覧

### 教員

受賞日	受賞名	所属・職名	受賞者	備考
H17.10.10	Max Perutz Prize	大学院理学研究科助手	松浦 能行	
H18. 4. 7	日本機械学会 学会賞	大学院工学研究科教授	石田 幸男	劉 軍 (大学院工学研究科講師) と連名
H18. 4. 7	日本機械学会 学会賞教育賞	大学院工学研究科教授	石田 幸男	Haig Edward (大学院国際言語文化研究科助教授)、村田泰美 (名城大学助教授)、Men'shov Igor (大学院工学研究科助教授)、長谷照一 (長谷国際特許事務所) と連名
H18. 4. 7	日本機械学会 学会賞	大学院工学研究科助教授	福澤 健二	伊藤伸太郎 (日本学術振興会特別研究員)・張 賀東 (大学院情報科学研究科助手)・三矢保永 (大学院工学研究科教授) と連名
H18. 6.14	第6回核融合エネルギー連合講演会 優秀発表賞	大学院工学研究科助教授	杉山 貴彦	
H18. 6.17	De Ocampo Award	名誉教授	三宅 養三	
H18. 6.17	科学基礎論学会 学会賞	大学院情報科学研究科 助教授	伊勢田哲治	
H18. 6.17	International Consortium for Landscape and Ecological Engineering Poster Award	大学院工学研究科助手	田代 喬	
H18. 6.19	工作機械技術振興賞 論文賞	大学院工学研究科教授	社本 英二	樋野 励 (大学院工学研究科講師)、他 3 名と連名
H18. 6.29	Gordon Research Conference 2006 "High Pressure, Research At" Best Poster Award	大学院環境学研究科助手	奥地 拓生	
H18. 7. 6	3次元画像コンファレンス2005 優秀論文賞	大学院工学研究科助教授	藤井 俊彰	
H18. 7. 6	3次元画像コンファレンス2005 優秀論文賞	大学院工学研究科助手	遠藤 知博	
H18. 7.10	日本塑性加工学会 優秀講演論文奨励賞	大学院工学研究科助手	吉田 佳典	
H18. 7.10	Asia Oceania Geosciences Society Honorary Member	太陽地球環境研究所教授	上出 洋介	
H18. 8. 3	日本認知科学会 論文賞	附属図書館助手	寺井 仁	三輪和久 (大学院情報科学研究科教授)、 古賀一男 (エコトピア研究所教授) と連名
H18. 8.29	第28回応用物理学会 解説論文賞	大学院工学研究科教授	馬場 嘉信	
H18. 8.30	水文・水資源学会 国際賞	地球水循環研究センター 教授	安成 哲三	
H18. 9.12	応用磁気学会 業績賞	大学院工学研究科教授	井上順一郎	
H18. 9.15	日本植物学会 学術賞	大学院理学研究科教授	近藤 孝男	

### 学生

受賞日	受賞名	所属・学年	受賞者	備考
H17.11	IEEE Nuclear and Plasma Sciences Society Graduate Scholarship Award	大学院工学研究科 D3	Md. Abdur Razzak	
H18. 1. 9	日本放射光学会 学生会員ポスター発表賞	大学院工学研究科 M2	犬飼 学	
H18. 5.25	17th International conference on Plasma Surface Interaction in controlled fusion devices The prize for the excellent poster	大学院工学研究科 M2	渡辺 大輔	
H18. 6.16	電子情報通信学会東海支部 平成17年度学生研究奨励賞	大学院工学研究科 D2	打田 良介	
H18. 7. 9	日本カリキュラム学会研究奨励賞	大学院教育発達科学研究科 D2	野木森美和子	
H18. 7. 9	日本心臓リハビリテーション学会 第3回 Young Investigator Award	大学院医学系研究科 M2	清水 優子	
H18. 7.13	第28回コンクリート工学講演会 年次論文奨励賞	大学院工学研究科 M2	中村 翔	
H18. 7.13	第28回コンクリート工学講演会 年次論文奨励賞	大学院工学研究科 M2	松井 義雄	

## 受賞者一覧

受賞日	受賞名	所属・学年	受賞者	備考
H18. 7.29	Japan Society of Civil Engineerings Certificate of Excellence	大学院工学研究科 D3	Mohamed Shawky	
H18. 7.29	Japan Society of Civil Engineerings Certificate of Excellence	大学院工学研究科 D2	中村 友昭	
H18. 7.29	Japan Society of Civil Engineerings Certificate of Excellence	大学院工学研究科 M1	松井 延行	
H18. 7.29	Japan Society of Civil Engineerings Certificate of Excellence	大学院環境学研究科 D3	周 新	井村秀文（環境学研究科・教授）と連名
H18. 8. 4	地球環境貢献賞	平成17年度本学修了生（株式会社 ISOWA）	園田 益史	大西暁生（総合地球環境学研究所上級研究員、平成17年度本学修了生）、白川博章（大学院環境学研究科助手）、井村秀文（大学院環境学研究科教授）と連名
H18. 8.29	第20回（2006年春季）応用物理学会講演奨励賞	大学院工学研究科 D3	竹内正太郎	
H18. 9. 2	日本臨床栄養学会 若手奨励賞	大学院医学系研究科 D4	岡田希和子	

\*受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

## 新任部局長等の紹介

### ●研究所事務部長



横田 圭介  
(よこた けいすけ)

〈略歴〉

昭和42年4月 名古屋大学採用  
平成15年1月 名古屋大学法学部・法学研究科事務長  
平成18年10月 名古屋大学研究所事務部長

### ●医学部・医学系研究科事務部次長



根津 郁夫  
(ねづ いくお)

〈略歴〉

昭和44年7月 名古屋大学採用  
平成15年4月 名古屋大学太陽地球環境研究所事務長  
平成16年4月 名古屋大学文学部・文学研究科事務長  
平成18年10月 名古屋大学医学部・医学系研究科事務部次長

## 本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年8月16日～9月15日]

記事	月日	新聞等名
1 書籍：「大宇宙の誕生」福井康雄・理学研究科教授	8.16 (水)	中日 (朝刊)
2 ドライミスト装置、相次ぎ登場：ドライミスト装置が初登場したのは、昨年の愛知万博会場 当時本学教授だった開発者の辻本誠・東京理科大学教授は、「この装置で、エネルギーを大量に使う社会から脱皮できるのではないかな。極言すれば、生き方を変える技術と言ってよいかもしれません」と話す	8.16 (水)	中日 (夕刊)
3 イノベーション日本の底力：これまで自然科学分野でノーベル賞を受賞した日本人9人の内、4人が化学賞で、2000年から3年連続で受賞するなど日本人の同化学賞受賞が目立つことについて、2001年に同化学賞を受賞した理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授は、「(かつての) 優秀な学生の多くは化学者を目指したからだ」と強調する	8.18 (金)	日経 (朝刊)
4 大学教授や法曹関係者らでつくる民間団体「民事訴訟制度研究会」(代表：菅原郁夫・法学研究科教授)は、民事訴訟を経験した3145の個人・法人を対象に、裁判の満足度や裁判官や弁護士の印象を訪ねる意識調査を今月から実施、年内に集計結果を公表する	8.19 (土)	日経 (朝刊) 朝日 (朝刊)
5 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 太陽と月をつかむ阿修羅	8.20 (日)	中日 (朝刊)
6 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「21世紀の創造」が10月から11月にかけて、東京・福岡・大阪の3都市4会場で開催される 高校生特別講座や理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授ら、5人のノーベル賞受賞者が参加するキャンパス・セッションなど	8.21 (月)	読売
7 知の先端：岸義人・米ハーバード大学教授 1979年、恩師である故・平田義正・本学教授により猛毒物質「パリトキシン」と出会った岸教授は、10年以上をかけて全合成に成功 「有機合成化学の極地」と絶賛された	8.21 (月)	サンケイ
8 高校と盲・ろう・養護学校の教員向け学習会「力量講座」24、25日開催 速水敏彦・教育発達科学研究科教授の講演など	8.21 (月)	中日 (朝刊)
9 愛知県高校教職員組合主催「力量講座」24、25日開催 速水敏彦・教育発達科学研究科教授の講演など	8.21 (月)	中日 (朝刊)
10 名大サロンの主役：高橋亨・文学研究科教授 紫式部の心と身の相克と葛藤	8.22 (火)	中日 (朝刊)
11 文部科学省の平成18年度「派遣型高度人材育成協同プラン」に、大学院工学研究科の「研究開発リーダーを育てる派遣型実践教育」など10件が採択	8.22 (火)	日刊工業
12 オープン・カレッジ「自由奔放！サイエンス」9月9日から2007年3月17日まで全10回開講 第1回は、吉田純・医学系研究科教授が「脳の手術：過去と今とこれから」と題して話す	8.22 (火)	中日 (朝刊)
13 リンク：わたしのこだわりファッション 酒井手古奈さん・本学学生	8.22 (火)	中日 (朝刊)
14 科学技術交流財団は、共同研究推進事業の2006年度分として、北川邦行・エコトピア科学研究所教授らとグリーンユーティリティの「省エネ薄膜型照明パネルの開発」など2件を採択	8.23 (水) 9. 1 (金)	日刊工業 中日 (朝刊)
15 『好感』のありか：テレビ視聴と仮想的有能感の関係について調査をした宮川純さん・本学大学院生は、「現実逸脱キャラは、人間関係に縛られずに言いたいことを行ってくれるのが魅力。発言内容ではなく、ブレない姿勢にあこがれるのだと思う」と話す。速水敏彦・教育発達科学研究科教授は、「みんな、逸脱するヒーローに深く感情移入しているわけではない。軽くひかれる、ぐらいではないか」と指摘する	8.23 (水)	朝日 (朝刊)
16 中世史研究会シンポジウム「中世史家・網野善彦一原点の検証―」9月2日開催 稲葉伸道・文学研究科教授らによる4つの問題提起の後、討論する	8.23 (水)	朝日 (夕刊)
17 冥王星を惑星から除外：福井康雄・理学研究科教授は、「そもそも冥王星を惑星としたことがおかしかった。結論はとても妥当で自然」と話す	8.25 (金)	中日 (朝刊)
18 スマトラ沖大地震後の地形変化を調査した海津正倫・環境学研究科教授は、タイのカオラック平野の河川に沿った場所で引き波によって起こったと考えられる浸食を発見し、「津波は高い押し波が襲ってくるだけでなく、引き波も災害を起こす。警鐘として受け止める必要がある」と話す	8.25 (金)	朝日 (夕刊)
19 26日、公立病院が深刻な医師不足に陥っている問題で、愛知県と同県医師会が初会合を開き、本学医学部、藤田保健衛生大学、名古屋市立大学医学部、愛知医科大学、浜松医科大学医学部の病院長が出席 5大学が連携し、医師を派遣する仕組み作りについて協議した	8.26 (土) 8.27 (日)	読売 毎日 (朝刊)
20 リソナ銀行名古屋支店でインターンシップに参加している本学など5大学11人の学生が25日、窓口営業に挑み、来店客に接した	8.26 (土)	中日 (朝刊)
21 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 敦煌莫高窟第295窟の涅槃図	8.27 (日)	中日 (朝刊)
22 中日新聞を読んで：中西久枝・国際開発研究科教授 米国批判に尻込み	8.27 (日)	中日 (朝刊)
23 愛・地球博閉幕1周年イベント「ことばのそら」に向けた事前ワークショップが27日に開催された メンバーの竹沢邦泰さん・本学大学院生は、「願うだけでなく何が出来るか考えるきっかけにと思って企画した。9月の展示は皆さんの『願い』と『約束』を書いた言葉に埋もれるような空間をつくりたい」と話す	8.28 (土)	中日 (朝刊)
24 レーザー：経済産業省の産学連携製造中核人材育成事業の一環で、トヨタ自動車などと社会人向け鋳物講座を企画した野村宏之・工学研究科教授は、社会人対象の講座について、「いかに実用の場で生かされるかを念頭に置き、現場の事例を引き合いにしたアドバイスを心がけている」と語る	8.29 (土)	日刊工業
25 リンク：私のこだわりファッション 安藤七恵さん・本学学生	8.29 (土)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年8月16日～9月15日]

記事	月日	新聞等名
26 健康東海プラザ：「ホスピー健康と文化の集い」で高松純樹・医学部附属病院教授が講演 難病ITPとピロリ菌の関係	8.30 (日)	読売
27 国立大学入試 後期日程の募集人員の割合が2割切る：本学では、5学部で後期日程を廃止し、推薦入学を実施	8.30 (日)	中日 (朝刊)
28 科学喫茶 (サイエンスカフェ)「大宇宙の誕生」9月2日開催 福井康雄・理学研究科教授を囲み、宇宙の誕生などについて語り合う	8.30 (日)	中日 (朝刊)
29 福井康雄・理学研究科教授、芝井宏・同研究科教授、大西利和・同研究科附属南半球宇宙観測研究センター助教授ら本学の研究者7人が参加している国際的な共同観測プロジェクト「SAGE」で、天文衛星スピッツァーがとらえた大マゼラン星雲の赤外線画像を公開	8.31 (月)	中日 (朝刊)
30 身近な活断層：安藤雅孝・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授 今後30年間の地震発生確率が9%と高い琵琶湖西岸断層帯と、南部が京都の市街地に入り込む三方・花折断層帯 建物の損壊に限らず、火災によって大事な文化財を失うことも懸念される	9. 1 (金)	中日 (朝刊)
31 文化往来：社会史としての地震研究発表会「歴史災害と都市」で、本学の研究者は、1945年に起きた三河地震の絵画による再現プロジェクトを報告	9. 1 (金)	日経 (朝刊)
32 科学技術交流財団の「先導的科学技術共同研究事業」の一環として、名古屋工業大学やピコデバイスなどと共同で、手に装着して人間の皮膚表面から出る微量ガスを採取、分析する装置を開発	9. 1 (金)	日刊工業
33 第41回愛知県老人福祉大会が8月31日に開催され、世代間交流を深めることなどを柱とした大会宣言の採択や、福和伸夫・環境学研究科教授による「大地震への地域とわが家の備え」と題した講演が行われた	9. 1 (金)	中日 (朝刊)
34 「第1回シルバー世代講演会」7日開催 「予防の重要性を考える」をテーマに下方薫・医学系研究科教授が講演する	9. 1 (金) 9. 4 (月)	中日 (朝刊) 読売
35 訃報：水谷泰弘・本学名誉教授	9. 2 (土)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
36 「名古屋大学国土形成計画シンポジウム」が1日に開催され、学生ら約300人が参加 持続的で安全・安心な国土形成の方策について、専門家がそれぞれの立場から意見を述べた	9. 2 (土)	中日 (朝刊)
37 動き始めた減災：防災教育にも積極的に取り組む福和伸夫・環境学研究科教授は、「学校での経験は大きい。それが家族に伝わり、地域へと広がっていけば、減災につながります」と話す	9. 2 (土)	読売
38 中日くらし友の会公開講演会「憲法を生かすということ」11日開催 堀内守・本学名誉教授と弁護士の大脇雅子氏が対談する	9. 2 (土)	中日 (朝刊)
39 国立大黒字大作戦：本学では、電気代や水道代などを節約するため、パート職員らも含め全職員が一斉に夏休みを取る試みを昨年から始め、昨年度は2日間で数百万円の削減効果を得た	9. 3 (日)	読売
40 わくわく探検：大地震に生き残ろう こども記者たちが、家の揺れ方を学ぶ教材「ぶるる」を開発した福和伸夫・環境学研究科教授に取材	9. 3 (日)	中日 (朝刊)
41 書評：「真彦と冬彦」池内了・本学名誉教授編 格調高い好エッセー	9. 3 (日)	中日 (朝刊)
42 科学技術振興機構は、先端計測分析技術・機器開発事業の2006年度の新規開発課題として、「膜に関連するたんぱく質の配列・構造粗視化解析技術」(チームリーダー：美宅成樹・工学研究科教授)など12件を採択	9. 4 (月)	日刊工業
43 レーザー：理化学研究所理事長・野依良治・本学名誉教授は、「私はモーツァルトよりアインシュタインの方がエライと思う」と、「モーツァルト派」の小柴昌俊・東京大学名誉教授に反論する	9. 5 (火)	日刊工業
44 国立大学と大学共同利用機関の2005年度決算発表 91法人の利益の総額は716億円で、本学の総利益は20億529万円	9. 5 (火)	日経 (朝刊) 他2社
45 時のおもりの総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 「人間カンバン方式」	9. 5 (火)	中日 (朝刊)
46 岐阜県恵那市の千畳敷公園春日野記念相撲場で2日、本学相撲部と地元住民との交流会「どすこい！明智ジャズナイト」が開催された	9. 5 (火)	中日 (朝刊)
47 学生辞典：「あ」ーアジア 尾関雄一朗さん・本学学生 教授もハマるアジア	9. 5 (火)	中日 (朝刊)
48 皇室典範改正問題 識者に聞く：羽賀祥二・文学研究科教授 永続的な安定を目指すなら、女性・女系天皇の可能性を引き続き探るべき	9. 6 (水)	中日 (夕刊)
49 大学院環境学研究科は6日、教員に女性を優先的に採用する「運用ルール」を決定 林良嗣・環境学研究科長は、「女性が輝いていない組織は衰退する。意識的に優遇することでトップレベルの優秀な女性の人材を集め、研究科の魅力を高めたい」と話す	9. 7 (木)	中日 (朝刊)
50 「他人軽視の若者」 速水敏彦・教育発達科学研究科教授に聞く：若者には個性化の前に社会化を促すことが必要	9. 7 (木)	日経 (夕刊)
51 「映画甲子園2006」で、教育学部附属高等学校映像演劇サークルの「扉の向こう」が入賞 同サークル部長で監督を務めた横山裕一朗くん・同高校3年生は、「この映画制作を通じて自分たちのきずなも強くなり、学ぶことが多かった」と話す	9. 8 (金) 9. 9 (土) 9.12 (火)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊) 中日 (夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年8月16日～9月15日]

記事	月日	新聞等名
52 学校法人南山学園に、昨年度180億円相当の寄付があったことが判明 本学は200億円を目標に基金を募っているが、まだ目標の割にも達していないのが現状	9. 8 (金)	中日 (朝刊)
53 博士漂流：7月から本学では「ノン・リサーチ キャリアパス支援事業」を始めた 武田穰・産学官連携推進本部教授は、「発想を転換、非研究分野に博士を送り出したい」と話す	9. 9 (土)	中日 (夕刊)
54 本学や愛知県、名古屋市などで組織する愛知建築地震災害軽減システム研究協議会は、今秋から「耐震化アドバイザー」の養成講座を開設する	9.10 (日) 9.12 (火)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
55 モンゴルと本学、新潟大学などの共同研究チームは、モンゴル・ウランバートル近郊で約40億年前の海に生息していた放散虫の殻の化石を発見	9.10 (日)	日経 (朝刊)
56 ふしぎ科学館：海洋プレートと同じ方向に沈み込んでいる大陸プレートの境界が、何年かに1度、ゆるゆるとした滑りやすい状態になった際、大陸プレートが逆方向にゆっくりと滑り出すのが「ゆっくり滑り」だと、鷲谷威・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教授は説明する	9.10 (日)	読売
57 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 雲岡石窟の大仏	9.10 (日)	中日 (朝刊)
58 この国のみそ：境内にラマ5世の銅像が建ち、駐日大使ら多くのタイ人が集う日泰寺には、パンジー・クスマーさん・本学留学生も「大事な試験の前にお参りする」と話す	9.10 (日)	中日 (朝刊)
59 素粒子ニュートリノが質量を持つことを最終確認するための国際共同実験 OPERA が欧州で始まり、参加する丹羽公雄・理学研究科教授は、「実験用ビームがイタリア側へ到達し、計画通りの機能を発揮していることを確認」、本格的な実験は10月から約5年間続くが、「早ければ来年秋までに成果が出せる」と話す	9.12 (火)	日経 (朝刊) 他3社
60 21世紀 COE プログラム公開講演会「宇宙のフロンティアを拓く—宇宙物理学の挑戦」15日開催 宇宙航空研究開発機構理事・宇宙科学研究本部長の井上一氏が講演する	9.12 (火)	中日 (朝刊)
61 2006年秋季特別展「江戸時代の村と地域—美濃養老・日比家文書にみる暮らしと災害」29日から10月20日まで附属図書館で開催	9.12 (火)	中日 (夕刊)
62 米誌ニューズウィークが「世界の大学100校」を選定 日本からは5校がランク入りし、本学は94位	9.13 (水)	読売
63 秋篠宮ご長男、「悠仁」と命名：竹内弘行・文学研究科教授は、「古典にもある古い言葉だが、現代でもなじみのある漢字。21世紀のこの時代に『腰を落着けてゆったりと』という込められたメッセージは、よろしいのではないかと話す	9.13 (水)	中日 (朝刊)
64 松見紀佳・生命農学研究科助教授らの研究グループは、リチウムイオンを選択的によく通す電解質を開発	9.13 (水)	日経産業新聞
65 福井康雄・理学研究科教授の研究グループは、南米チリに設置した電波望遠鏡「なんてん」による観測結果の分析で、ブラックホールから噴出する「ジェット」を2ヶ所で発見 福井教授は、「分子雲によりジェットを確認したのは世界で初めて。今回の新手法によって、新たなブラックホールが次々と見つかるかもしれない」と話す	9.14 (木) 9.15 (金)	読売 他3社
66 毛利佳年雄・本学名誉教授と福島雅典・京都大学教授らは、超低周波数で発生させた「磁気」を高血圧症の患者に浴びせると血圧が降下する作用があることを発見	9.14 (木)	日刊工業
67 老年学：井口昭久・医学系研究科教授 古里の記憶は脳を活性化させる	9.14 (木)	朝日 (朝刊)
68 中日新聞社と国連WFP協会がアフリカの飢餓救済をテーマにした講演会を10月14日に開催 平野真一総長らがパネルディスカッションを行う	9.15 (金)	中日 (朝刊)
69 祖父江元・医学系研究科教授の研究チームは、難病「球脊髄性筋萎縮症」の患者を対象に、病気の進行を抑える薬を用いて、製薬会社ではなく医師が主体となって行う「医師主導治験」を9月下旬から行う	9.15 (金)	中日 (朝刊) 他2社
70 東海地方8月の地震：林能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手	9.15 (金)	読売
71 愛・地球博閉幕1周年：「EXPO エコマネー」の一環として、「公共交通エコポイント」が10月にも実用化される NPO 法人エコデザイン市民社会フォーラム副代表理事の森川高行・環境学研究科附属交通・都市国際研究センター教授は、「利用者を楽しんでもらいながら、車の利用を減らせる効果が見込める」と話す	9.15 (金)	読売
72 「第4回防災ユースフォーラム」16日から18日まで本学などで開催 同フォーラム幹事である本学大学院出身の倉田和己さんは、「卒業生が現役を支える体制も今後整えていきたい」と話す	9.15 (金)	読売
73 防災減災：本学の学生らによるボランティアサークル「震災ガーディアンズ」は、震災を模擬体験する「すどろく」を考案 「一時避難編」、「事前準備編」、「避難所生活編」などを完成させ、子どもたちに分かりやすく防災を伝える催しを企画している	9.15 (金)	読売
74 全国の大学生バンドによるロックフェスティバルが16日開催 本学など6大学の学生メンバーで編成する4バンドが出演する東海地区など、全国7地区の予選を勝ち抜いた10バンドがオリジナル曲でグランプリを競う	9.15 (金)	読売

## 中国語広報誌「走近名大」を刊行

本学では、教育・研究の成果や活動状況等の情報を中国の大学・研究機関に向けてリアルタイムに発信し、本学の魅力を広くアピールするため、中国語広報誌「走近名大」(Close Up Nagoya University)を創刊しました。

これは、2006年5月現在で、中国の32大学・研究機関と協定を結び、国際学術交流を推進し、本学に在籍する留学生1,161名のうち、中国からの留学生が4割(484名)を占めている本学にとって、中国の大学との教育・研究上の国際連携が、近年、ますます重要になりつつある状況を鑑みて創刊に至ったものです。

本誌は、本学のニュース、留学情報等を紹介するもので、昨年度11月に設立した中国 上海事務所を通じて、中国の学術協定機関、中国の教育主管部門、同窓会メンバーなどに送付しています。

「走近名大」は、本学の中国における知名度を高め、優秀な人材獲得に資するものと期待しています。

詳しくは、国際交流協力推進本部ホームページ (<http://www.iech.provost.nagoya-u.ac.jp/cn/whatsnew.html>) をご覧ください。

### お問い合わせ：

名古屋大学国際企画室

電話：052-788-6262 FAX：052-789-2045

E-mail：info-oisp@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

**走近名大**  
名古屋大学  
2006年8月 第1号

**走进名古屋大学的新窗口**  
——写在《走近名大》创刊之际——

名古屋大学自其前身の色学创建以来已有130余年历史，经过其建设，现已成长为日本最主要的综合性大学之一。在“自由豁达”的学风指引下，名古屋大学注重人文与科学的协调发展，不断地培养优秀人才，开展最尖端的学术研究。为取得举世瞩目的科研成果并培育富有勇气的知识人才而不断努力。在我校多项举世瞩目的科研成果中，对低能核磁共振谱学获奖、赤崎勇教授蓝色发光二极管发明等更是独领风骚。

目前，名古屋大学已与200所海外高等研究机构签订了学术交流协议。自2006年5月最新统计，我校现有1151名留学生和众多海外研究者；其中，中国留学生484名占到全部的40%，构成了我校留学生的核心。我们为能够向留学生和海外研究者提供温馨的教育研究环境而倍感骄傲与自豪。

名古屋大学一贯重视与中国的学术合作。为了推动与中国32所机构的学术、研究方面的国际合作，建设亚洲地区的教育研究合作基地，我校已于去年11月在上海设立办事处。在此基础上，我校通过发行中文简报《走近名大》，全面向中国各界宣传我校的各种教学研究成果，推动理解和交流。衷心祝愿《走近名大》能够成为关注名古屋大学发展的中国新老朋友们了解我校的窗口，构筑起新的交流桥梁。

名古屋大学校长  
平野 敏一

*Li Shunshu*

目次	
总长致辞	1
名大上海办事处	1
名大沿革	2
名大Topics	2-4
研究室新闻	5
院系介绍	6
学在名大	7
留学名大	8

**名古屋大学上海办事处**

名古屋大学上海办事处作为名大第一所海外办事处于2005年11月11日在上海市内成立。

名大上海办事处依托上海交通大学徐汇校区，将为名古屋大学在中国展开国际合作研究、国际办学、国际产学研合作等事业提供支援，因而受到校内外寄予的莫大期望。同时，名大办事处也是名古屋大学在中国的宣传窗口，积极支援中国校友会的各项活动。

名大将以上海办事处为中心，更进一步地推动并加深与中国各方面的学术交流与合作。希望大家给予支持与鞭策。

■ 联络方式  
TEL/FAX: 86-21-6280-6185  
Email: office@nushanghai.net.cn  
URL: <http://www.nushanghai.provost.nagoya-u.ac.jp/cn/>

「走近名大」創刊号表紙

## イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容
<b>10月16日(月)</b> 場 所：環境総合館レクチャーホール 時 間：17時30分～19時 入 場 料：無料  [問い合わせ先] 災害対策室 052-788-6038	<b>第23回防災アカデミー</b> 講 師：岡田恒夫東京大学名誉教授 演 題：耐震補強のこれから
<b>11月10日(金)</b> 場 所：環境総合館レクチャーホール 時 間：17時30分～19時 入 場 料：無料  [問い合わせ先] 災害対策室 052-788-6038	<b>第24回防災アカデミー</b> 講 師：中村 豊株式会社 SDR 代表取締役、東京工業大学客員教授 演 題：情報と地震防災
<b>10月19日(木)</b> 時 間：13時30分～ 場 所：覚王山日泰寺  [問い合わせ先] 医学部・医学系研究科総務第一掛 052-744-2423	<b>平成18年度解剖弔慰祭</b>

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**10月20日(金)**

場 所：野依記念学術交流館 1階  
時 間：9時30分～17時

[問い合わせ先]

農学国際教育協力研究センター  
浅沼修一教授 052-789-4232

## 平成18年度第7回オープンフォーラム

講 師：John C. Onyango ICCAE 客員教授 他  
演 題：アフリカにおける稲作振興の現状と今後の日本の役割  
－ NERICA の研究と普及を例にして－



**10月21日(土)**

場 所：東郷町諸輪畑尻94  
生命農学研究科附属農場  
「農業館」

時 間：14時～16時

定 員：60名

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

大学院生命農学研究科附属農場事務掛  
0561-37-0210

## 地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園・講演会」

テ ー マ：ウイルスと昆虫の戦い  
講 師：小林迪弘生命農学研究科教授  
演 題：地球のもう一つの成功者昆虫に学ぶ

**10月21日(土)**

場 所：野依記念学術交流会館

時 間：13時～

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

大学院生命農学研究科 小田裕昭助教授  
052-789-4124

## 公開シンポジウム「化学と生物がきりひらく世界」 (農芸化学会中部支部第147回例会)

講 師 I：松岡信生物機能開発利用研究センター教授  
演 題：ゲノム研究がきりひらく作物分子育種  
講 師 II：渡辺修治静岡大学教授  
演 題：科学で迫る謎解き：花が香る仕組み  
講 師 III：長谷川峯夫キュービー株式会社  
演 題：「卵」から新たな想像、ロマン－農芸化学が生み出した価値－  
講 師 IV：河田照雄京都大学教授  
演 題：太るメカニズム、やせるメカニズム：生活習慣病との深い関わり

**10月21日(土)～22日(日)**

場 所：荘川及び長良川

時 間：未定

対 象：小学3年生～中学3年生  
及びその保護者

定 員：30名

参 加 費：保護者8,000円 中学生7,000円  
小学生6,000円

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

## 第5回地球教室（親子対象フィールドセミナー）

テ ー マ：荘川上流と長良川全域の石

**10月23日(月)**

場 所：野依記念学術交流館

[問い合わせ先]

学務部学務企画課 052-789-2159

## 平成18年度大学院秋季入学式 留学生特別コース入学式

**10月23日(月)～25日(水)**

場 所：シンポジオンホール

時 間：12時～15時

[問い合わせ先]

総務部人事労務課福祉・厚生掛  
052-789-5977

## 職員創作美術展

内 容：職員が創作した美術作品等の展示

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**10月24日(火)～12月23日(土)**

場 所：博物館展示室  
時 間：10時～16時  
休 館 日：日・月曜日  
入 場 料：無料

## 第9回名古屋大学博物館企画展

テ ー マ：本に貼られた小さな美の世界ー蔵書票ー



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**10月26日(木)、27日(金)**

場 所：国際開発研究科8F  
多目的オーデトリウム、  
留学生センター

時 間：

10/26(木) 10周年記念シンポジウム  
13時～17時

10/27(金) 同窓会発足記念イベント  
10時～16時30分

入 場 料：無料

## 名古屋大学短期留学受入れプログラム NUPACE

### 設立10周年記念シンポジウムと交換留学関係者同窓会



[問い合わせ先]

研究協力・国際部国際課 052-789-5733

**10月27日(金)**

場 所：IB 電子情報館

時 間：10時～17時

10時15分～12時 講演会

14時～15時20分 展示研究内容概要説明

13時～17時 研究室見学

入 場 料：無料

## テクノ・フェア名大2006



[問い合わせ先]

工学部・工学研究科総務課庶務掛

052-789-3406

**11月1日(水)～4日(土)**

11月1日

基調講演

場 所：環境学レクチャーホール

時 間：10時～12時

フォーラム1

場 所：博物館講義室

時 間：14時～17時15分

11月2日

フォーラム2

場 所：博物館講義室及び徳川美術館

時 間：9時～12時

及び14時～16時30分

11月3日～4日

第6回地球教室

場 所：未定

対 象：小学3年生～中学3年生

及びその保護者

定 員：30名

参 加 費：500円

## 第2回名古屋大学博物館国際フォーラム

テ ー マ：次世代教育と国際連携～地球教室を例に～

11月1日

基調講演「Teenagers and science-based museums」

講 師：Dr Walter Staveloz アメリカ科学博物館連盟理事長

フォーラム1「博物館と次世代教育：地域連携」

11月2日

フォーラム2「博物館と次世代教育：国際連携」

11月3日～4日

第6回地球教室（親子対象フィールドセミナー）



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**11月4日(土)、18日(土)**

場 所：経済学部カンファレンスホール  
時 間：10時～12時

**オープンカレッジ・自由奔放！サイエンス**

11月4日  
講 師：金井雄一経済学研究科教授  
演 題：金貨の時代からお札の時代へ：『お札』は『お金』だろうか

[問い合わせ先]

経済学部・経済学研究科  
エクステンションサービス  
ecoextender@soec.nagoya-u.ac.jp

11月18日

講 師：肘井直樹生命農学研究科助教授  
演 題：森を動かすミクロな世界

**11月8日(水)、17日(金)**

場 所：博物館講義室  
時 間：15時～16時30分  
入 場 料：無料

**第63回特別講演会**

講 師：櫻井龍彦国際開発研究科教授  
演 題：蔵書票入門～歴史から楽しみ方まで～

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**第64回特別講演会**

講 師：張 玉玲南山大学非常勤講師  
演 題：李平凡と日中版画交流～1940～50年代を中心に～

**11月10日(金)**

場 所：中央図書館5階多目的室  
時 間：17時45分～19時

**附属図書館研究開発室**

**第23回オープンレクチャー**

講 師：逸村 裕筑波大学教授

[問い合わせ先]

附属図書館庶務掛 052-789-3667

**11月13日(月)**

場 所：ベンチャー・ビジネス・ラボラ  
トリー3階ベンチャーホール  
時 間：13時30分～15時  
入 場 料：無料

**大学院情報科学研究科**

**先端技術公開セミナー**

講 師：小川克彦日本電信電話株式会社サイバーソリューション研究所所長  
演 題：プロバン家電：ブロードバンド時代の情報家電

[問い合わせ先]

大学院情報科学研究科  
外山勝彦助教授 052-789-5146

**11月15日(水)**

場 所：文系総合館7階オープンホール  
時 間：12時～14時

**高等教育研究センター**

**院生のための大学教授法研修会**

内 容：高等教育研究センターが将来の大学教員をめざす大学院生の  
授業スキル修得をサポートします。

[問い合わせ先]

高等教育研究センター  
近田政博助教授 052-789-5692

**11月18日(土)**

場 所：環境総合館1階  
レクチャーホール  
時 間：13時20分～16時30分

**第8回まちとすまいの集い**

テ ー マ：まちとすまいの安全・安心  
主 催：大学院環境学研究科都市環境学専攻建築学教室  
13時20分～13時30分 教室主任あいさつ  
13時30分～15時10分 第一部 講演

講 師：森 保宏環境学研究科教授  
演 題：安心して暮らすためのリスクマネジメント  
講 師：谷口 元工学研究科教授  
演 題：デザインにおけるユーザー参加と専門家の役割  
講 師：松浦和雄 (ウッドフレンズ)  
演 題：実際の家づくり街づくり  
講 師：辻 喜光 (名古屋市)  
演 題：建築法規のかかわり方

[問い合わせ先]

大学院環境学研究科都市環境学専攻  
まちとすまいの集い事務局  
052-789-3587

15時20分～16時30分 第二部：パネルディスカッション  
コーディネーター：西澤泰彦環境学研究科助教授  
総司会：勅使川原正臣環境学研究科教授



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**11月24日(金)**

場 所：環境総合館 1階  
レクチャーホール  
時 間：10時～19時30分

## 環境学研究科設立 5周年記念、附属交通・都市国際研究センター 設立記念式典およびシンポジウム

主 催：大学院環境学研究科都市環境学専攻建築学教室

10時～10時10分 シンポジウム開会あいさつ  
10時10分～11時30分 シンポジウム第一部基調講演  
13時～16時15分 シンポジウム第二部（パネルディスカッション）  
16時30分～17時15分 式典（研究科長挨拶など）  
17時30分～19時30分 記念交流会

[問い合わせ先]

大学院環境学研究科事務部  
052-789-3451、3454

**11月25日(土)**

場 所：博物館講義室  
時 間：13時30分～15時  
入 場 料：無料

## 第65回特別講演会

講 師：前野みち子国際言語文化研究科教授  
演 題：書物と觸體

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

名大トピックス No.161 平成18年10月16日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ  
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

やわらかな光をまとう  
夜の留学生センター  
(平成18年9月29日)



## 54 「名古屋医科大学」「名古屋帝国大学」等の学印

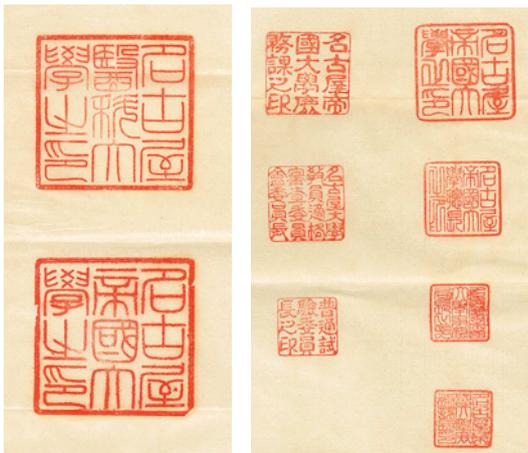
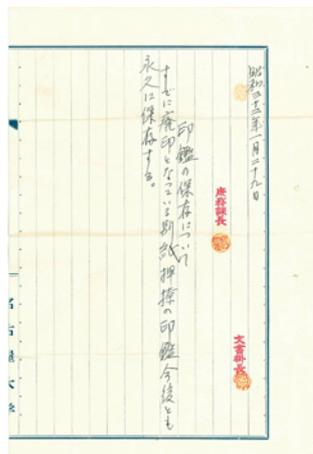
2006(平成18)年2月、総務広報課(現在の総務課)内で、すでに廃印となった公印等28本が箱に収められて書棚奥に保管されていたことが確認されました(写真1)。

これら28本の印鑑とともに保管されていた1957(昭和32)年1月29日付の原議書「印鑑の保存について」によると、それら28本のうち9本の印鑑については「廃印となっている別紙押捺の印鑑今後とも永久に保存する」とこととされています(写真2)。「名古屋医科大学」「名古屋帝国大学」(2種)「名古屋帝国大学総長」「名古屋帝国大学事務局長」「名古屋帝国大学庶務課長」「名古屋帝国大学庶務課」「名古屋大学教員適格審査委員会委員長」「普通試験委員長」の印鑑がそれです(写真3、4)。

ここでは、「名古屋医科大学」(名医大)と「名古屋帝国大学」(名帝大)の学印について紹介します。名医大(1931-1939)および名帝大(1939-1947)は、いずれも名古屋大学の前身校です。写真5には二つの石印が写っていますが、左下にあるのが名医大の印面で、右上にあるのが名帝大の印面です(印影は写真3、ともに印面外寸は60mm平

方)。この写真ではわかりにくいですが、名帝大のものは印材に亀裂が入っているため風糸が巻かれており、その他の部分にも少なからぬ損傷があります。一方、名医大のものは印材の厚みが1.5cm程度しかなく、印面裏側には鋸で切断されたような痕跡がみられます。おそらく名帝大の学印は、前身校である名医大の学印を切り落とした印材を再利用したものと考えられます。

さて、今回確認された公印等には、上述の永久保存印鑑(9本)のほかに「名古屋大学」の石印も含まれていました(写真6)。この学印が収められていた封筒には、同学印が1947年10月1日から1959年3月24日まで使用されていたとのメモ書きがあります。学内に残された記録によると、この学印は当時の卒業証書や学位記等に使用されていましたが、摩滅が著しいため改刻することが1958年12月に決裁されています。その後、新たに彫刻された学印(印材は柘植、印面外寸60mm平方)は、翌年3月18日に制定され、同月25日から旧印に替えて使用されるようになりました。



1	2	5
3	4	6

- 1 総務課に保管されていた学印等
- 2 原議書「印鑑の保存について」(1957年1月29日付)
- 3、4 同上別紙に押捺された印影(全9個)
- 5 「名古屋帝国大学」および「名古屋医科大学」印面
- 6 「名古屋大学」印面

